柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
https://kakio-kyoudo.jpn.org/
第 200 号

新年、あけましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申しあげます。

柿生郷土資料館館長　柿生中学校校長　石井　秀明

今年は干支でいえば、「乙巳」(きのとみ)です。「乙」は広がっていく美しい草花を表します。「巳」は草木が極限まで成長した状態です。「乙巳」に当たる 2025 年は、学んできたことや努力してきたことが、屈曲してきしむほどになり、上蓋を跳ねるがごとく芽吹くし一気に極限まで伸びるそんな勢いのある年になりそうです。蛇というと、音もなくスルスルと這いまわるイメージがあります。しかしながら、白蛇が日本各地で天候神と豊穣神として古くから信仰されており、良い象徴と捉えられることもあります。過去の巳年を振り返ってみると、努力した成果が実を結ぶような出来事が多く起こっています。

そこで、温故知新というとおり、百年前の大正一四年にあった出来事を調べてみました。柿生村では駅誘致のため、村内に敷地代金の寄付割当を行った。真福寺の井上信吉氏が運送業をフォード V8 で始めた。高津村に活動写真館があり、映画、芝居、時局講演会等、地域社会に貢献していた。明治製菓川崎工場操業開始。六郷橋・二子橋架橋。東神奈川と原町田間に電車運転開始。京浜運河を計画・着手。ラジオ放送開始。

柿生郷土史料館にとっては、本年が開館 15 年目にあたります。ちょうど今の中学 2・3 年生が生まれ育った月日と同じ年数、柿生郷土史料館が続いてきたということになります。柿生中学校の生徒たちが地域の方々に支えられながら成長しているように、柿生郷土史料館も、多くの方々のお力を頂戴しながら今日に至っていることを、改めて実感いたします。

昨年 10 月に行われた柿生中学校「第 62 回文化祭」におきましても、展示見学の一つとして史料館を開放していただきました。当日は史料館支援委員の方々が案内をしてくださり、たくさんの生徒や保護者の皆さんが熱心に見学したり、資料を手に取ってみたりと、郷土の歴史を振り返るひと時を過ごすことができました。

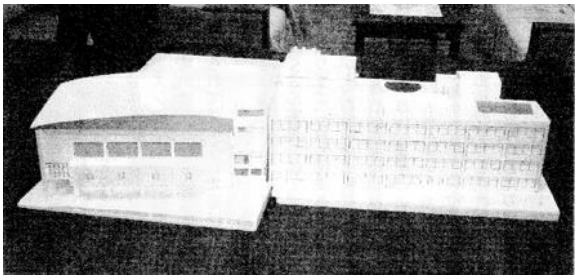
史料館今年も地域の皆様と共に、歴史と文化を学びながら、着々と歩んでまいりたいと存じます。

本年も、皆様のご活躍をお祈りするとともに、素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。

「柿生文化 200 号」発刊記念 柿生文化の発刊と校舎の完成

柿生郷土史料館支援委員会副委員長
柿生中学校同窓会元会長 鈴木正視

柿生中学校は昭和 22 年に誕生しました。私たち昭和 37 年卒業の第 15 期生も同じ年にうまれましたので、現在は柿生中学校と同じく 77 歳になりました。



新校舎の模型

新校舎への建て替えが現実の問題となり、新しい理想の学舎(まなびや)を造るため、学校長・教頭・PTA 代表・町内会・地域代表・同窓会代表を主な構成員として「校舎改築推進協議会(以後：推進協議会)」が結成されたのは、平成 17 年でした。同窓会長だった私も委員として末席に連なりました。川崎市側も、市教育委員会・まちづくり局・麻生区役所・設計事務所で構成された、「川崎市校舎改築検討委員会」を立ち上げ、推進協議会の要望を聞く形で具体

案作りが始まりました。校舎と共に史料館設立への歩みも同時に始まったのです。以後、推進協議会では、夜遅くまで議論を戦わせながら、皆の意見をすり合わせてゆきました。話の内容は校舎や史料館のことばかりではなく、祖先の話や元気な柿生・岡上をどう造っていくかなど、郷土のことに誰もが熱心でした。校舎・体育館・プールの位置などは地形や土質等の十分な検討をふまえて進められました。また、建設用地確保のための桜の木の一部伐採については、多くの意見が出され、伐採された木の有効活用に道を開きました。

伐採された桜の木で造られた重厚な案内板と設立趣意書

こうしたことの中で、一番苦労したのが「史料館」建設に関わることでした。消極的な市当局をどう動かすか、限られたスペースの中で、常設展示室・企画展示室・資料保管室・作業室などをどの位置に設けるか、展示する文化遺産をどう収集するか、さらには展示ケースなどの購入費をどう集めるかなども考えなければならず、皆で苦心しました。

柿生郷土史料館 常設展示室

そのような中で、建物の建設とともに史料館運営の核となる考え方を作る必要がありました。その第一として挙げられたのが広報誌の定期的な刊行でした。広報誌は館の情報発信の場として重要なものとなります。「どんな活動をしているのか」「史料館は柿生にとってどんな役割を果たせるのか」「郷土の歴史文化を知ることの意味は何か」などを的確に伝えていく役割を担うことになるのです。柿生郷土史料館の広報誌「柿生文化」はこうして誕生しました。当時の校長板倉先生が自らペンをとられた第 1 号の発行は平成 20 年 7 月 18 日でした。板倉先生は「温故知新の心を大切に～文化の発信基地としての柿生中学校を～」と記されました。新しいことを識(し)るには、古きを知る。すなわち、歴史は何千年もの過去からの知恵の蓄積であるということです。言い換えれば、歴史を知るということは祖先の知恵や体験を知る一番の手がかりになるということです。板倉校長と史料館創設を二人三脚で支えた小島一也氏は、平成 21 年 12 月に上梓された渾身の大著『麻生郷土歴史年表』の序にかえての末尾に、「私たちの生活は地域で営まれるもの、積み重ねられてきたこの地域の歴史を過去のものと片付けず、温故知新、何かのご参考になれば幸いでございます」と記されました。柿生郷土史料館設立の一番の狙いは、まさにここにあると思うのです。そのためには、色々な角度から歴史を知り、祖先の思いをより深く理解していこうではないかということなのです。

「柿生文化」とともに「カルチャーセミナー」が在るのもそのためです。「カルチャーセミナー」によって祖先の行動や思いを色々な角度から、深く立体的に語ってもらい、セミナーで語られたことを「柿生文化」によって、地域に向けて、さらに広い世界に向けて発信するのです。「柿生文化」と「カルチャーセミナー」は柿生郷土史料館の魅力の両輪とすべきものです。「紙面」と「場面」を使って郷土の発展のために役立つべく構想されたものなのです。第 1 回の「カルチャーセミナー」は平成 18 年 5 月 19 日に、旧校舎の木工室で開かれました。「柿生文化」創刊の 2 年 2 か月前でした。平成 22 年 11 月 20 日、新校舎落成式典に合わせて「柿生郷土史料館」が開館しました。史料館開館の 4 年前にはカルチャーセミナーが開始され、2 年 2 か月前には「柿生文化」が創刊されていたのです。史料館の活動や史・資料収集を推進するための柱となっているのが、「柿生文化」と「カルチャーセミナー」なのです。ここに地域と学校が両輪となって、併せて四つの輪で力強い歩みを続けてゆきたいですね。私も微力を尽くすつもりです。

カルチャーセミナー風景

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 10

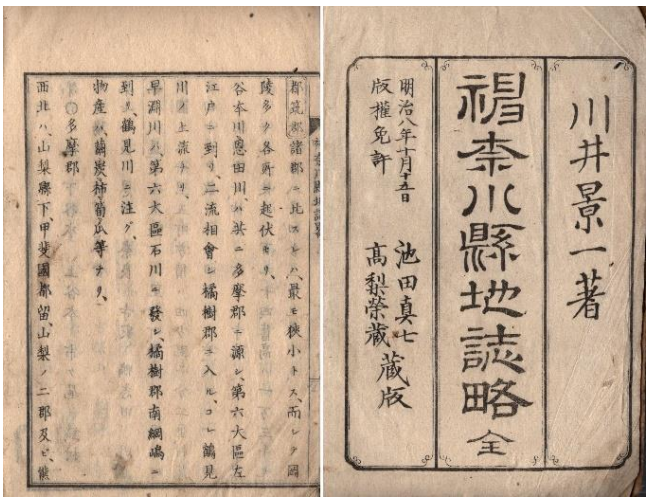
近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(10)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

近代の教科書にみる物産・禅寺丸柿(２)

明治期に県下で出版された地誌関係の教科書から禅寺丸柿の記載を探しだしてみることとする。

最初に明治 8 年(1875)10 月 15 日刊の川井景一著『神奈川県地誌略』をひもといてみる。本書は「此書固ト管下童蒙ノ為ニ編ス、意地学ノ初歩ニ資スルニ在リ」と例言に記すように、学童たちのために編まれた教科書である。構成は、県下各郡別の大区小区の村名、地形、山川、物産、町村の戸数、社寺・学校・石高などの計数を掲げている。県下の各小学校で使われた本書には、都筑郡の物産として「繭・炭・柿・筍・瓜等ナリ」と書き上げている。ここに登場する柿は、当然に禅寺丸柿とみなせる。その柿栽培は、柿生村と岡上村を中心に、他に中里村・新治村で盛んであった。繭は柿生村・岡上村・山内村・田奈村・中里村・新治村・都田村・都岡村などの各村々で、筍は中川村で、瓜は都田村・新田村で、炭はナラ・クヌギなどの雑木林が多い柿生村・田奈村・中里村・新治村・都岡村・二俣川村・西谷村などの村々で焼かれていた。参考までに橘樹郡の物産を記しておく。生糸・蚕種紙・海苔・蓮根・梨子・桃・杏・縄莚・酸漿・素麺・塩・貝類と多種類にわたっていた。著者の川井景一は、『神奈川県地誌提要』(1876 年刊)、『横浜新誌』(1877 年刊)などを著している。川井景一は、岩手県の出身の士族で、同 7 年頃に横浜に来た。『神奈川県地誌略』には、北方村(横浜市中区)に寄留とある。同 20 年頃に内務省地理局に奉職したという(『横浜の本と文化』)。



都筑郡の物産を載せる川井景一著
『神奈川県地誌略』(1875 年刊)　筆者蔵

明治 12 年(1879)11 月刊の小安鉦之助訓訳の『神奈川県管内地誌略字引』(本文 13 丁、袋綴じ本、活版印刷)の「物産の部」の項をみると、ここでは各郡別に分けずに県全体の物産として繭、生糸、織物、麻、紙、海苔、梨などをあげている。これらの物産は、県下でも著しく名高いものだけを取り上げたとしている。

明治 12 年 10 月 23 日刊の神奈川県学務課編纂の『神奈川県管内地誌略』(錦港堂蔵版、売捌人は師岡屋伊兵衛、本文 10 丁、袋綴じ本、活版印刷、付図：神奈川県地図)の「物産」の項には、「橘樹郡の海苔、鶴見村の梨」をあげているが、都筑郡を代表した果物であった禅寺丸柿は登場していない。

明治 20 年(1887)10 月刊の林吾一編『神奈川県地理小誌』(東京金港堂出版、本文 15 丁、活版印刷、付図：武蔵国・相模国の地図)の「物産」の項では、橘樹郡の海苔・梨が最も著名なるものとしてあげている。この教科書にも、都筑郡を代表した禅寺丸柿については記載していない。

明治 27 年(1894) 4 月 28 日刊、友松会編『神奈川県地誌』(本文 19 丁、袋綴じ本、活版印刷、付図「神奈川県全図」及び統計表各 1 枚)の凡例によると、本書は神奈川県高等小学第一学年の生徒を対象として、学校近傍の郷土の地理を教えるために編纂された教科書であることがわかる。広さ及び境界、区制、地勢、山嶽、河湖、港湾、気候・地味、戸口・生業、産物、道路、鉄道・舟路、名所、寺社などについて記している。本書の付録である「統計表」に、都筑郡の産物としては梨を、橘樹郡では柿と海苔を記載している。

明治 29 年(1896) 4 月 22 日刊、北村包直草案、木曽義比編・発行『橘樹郡用地理史談』(本文 12 丁、袋綴じ本、活版印刷、付図「橘樹郡地図」1 枚)の第 8 章産物の項で「農産物には、穀類、菜蔬、筍、柿等出し、特に多摩川に沿ひたる地は水利の便ありて二毛田多く。米作に名高し。大師河原の梨。海苔。向丘村の氷、多摩川の鮎等いつれも有名なり」と書き上げている。ここでいう「柿」とは、当然に禅寺丸柿を指していよう。この教科書は、橘樹郡内の小学校用教科書としてだされたものである。禅寺丸柿は、県下を代表した著しく名高い果物ではなかったが、当時の教科書には登場してくる。

（続く）

『柿生文化』200 号

『柿生文化』の歩み

『柿生文化』の創刊号は平成 20(2008)年 7 月 18 日に発行されました。それから 17 年、令和 7（2025）年の新年号が 200 号となりました。

創刊当初の『柿生文化』は、ワープロの原稿を学校の輪転機で印刷した手作り感満載の B5 版で、紙も学校の備品を使わせてもらっていました。板倉校長の熱意に甘えさせてもらっていたのですね。柿生郷土史料館設立準備委員会は活動していましたが、いまだ資金確保のための奉加帳も廻しておらず、記事も小島一也氏の「麻生のルーツを探る」の連載記事以外は、板倉校長以下中学校の先生方の寄稿になっていました。

下に掲載したのは、平成 21（2009）年 10 月発行の第 16 号の 3 面です。柿生郷土史料館設立準備委員たちが研修を兼ねて市民ミュージアムを視察した様子が分かります。次の写真は平成 22(2010)年 11 月 20 日の史料館開館の様子を再現した第 30 号(同年 12 月号)です。学者市長として知られた阿部市長が熱心に展示物をご覧になっていらっしゃいます。

開館後も、平成 25（2013）年 3 月発行の第 58 号まで、柿生中学校の輪転機と紙を使わせてもらって印刷していたのですが、翌月発行の第59号からは、市民館や図書館等公共施設に配布・展示するにはと、A4 版印刷に切り替えました。その関係で印刷は外注となり、MK プリント様にご縁が出来、今日もお世話になっています。

ここでは、平成 28 (2016) 年 9 月発行の第 100 号をご覧ください。今後も『柿生文化』をご愛読ください。

柿生文化 16 号 3 面

柿生文化 30 号 1 面

柿生文化 100 号 1 面

柿生郷土史料館
第 96 回カルチャーセミナー

ふるさと麻生の昔と今を思う

～川崎市制百年を期して～

3 年前の 1 月、民俗学の手法を駆使して、好著『柿ふるさと』を上梓した「ふるさとを語る柿岡塾」の前会長（塾頭）を務められた中山茂氏をお迎えして、川崎市と柿生地域の戦中・戦後の暮らしと社会の変化に関して、思うところを存分に語っていただきます。

米寿を迎えて、なお意気軒高と地域の進むべき方向について、思うところを発信し続け、さらに将来に残すべき地域の伝承を採録し続けておられる中山氏の語るところは、間違いなく示唆に富むものとなるでしょう。皆様の参加をお待ちしています。

講　師：中山　茂 氏
（ふるさとを語る柿岡塾前会長）
日　時：1 月 26 日(日)
13 時 30 分～15 時 30 分
会　場：柿生中学校 視聴覚室
参加費：無料。
協　讃：ふるさとを語る柿岡塾

柿生郷土史料館 今後のカルチャーセミナー予告

柿生郷土史料館 第 97 回カルチャーセミナー

夏蒐共同塾と義僊師・祖関師

講師：菅原節生氏（修廣禅寺前住職）
日時：3 月 16 日(日)13 時 30 分～15 時 30 分
会場：柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館 第 98 回カルチャーセミナー

二ヶ領用水再考（仮題）

講師：菊地恒雄氏（日本地名研究所研究員）
日時：4 月 26 日(土)13 時 30 分～15 時 30 分
会場：柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日　：1月１２・１９・２６日（日曜日）　　２月８・１５・２２日（土曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時